

## 特別展「天平礼賛 高遠なる理想の美」

はじめに

当館では特別展「天平礼賛 高遠なる理想の美」を開催した。新型コロナウイルスによる感染症拡大という経験のない危機の中で準備・開催した展覧会でもあった。ここに記録を留めることとしたい。

### 1. 展覧会の概要

展覧会名は特別展「天平礼賛 高遠なる理想の美」。会期は令和二年（二〇二〇）十月二十七日から十二月十三日。会期中一回展示替えをおこなった。出品作品は絵画・彫刻・工芸・書蹟の多分野にわたり、古代から近現代に至る国宝五件、重要文化財二三件を含む全一二〇件で構成した。

主催は大阪市立美術館と朝日新聞社で、公益財団法人大阪観光局の後援を得た。また、文化庁令和二年度地域ゆかりの文化資産を活用した展覧会支援事業（日本博を契機とする文化資源コンテンツ創成事業）の補助を受けた。印刷物・図録等のデザインは大向デザイン事務所、印刷物・図録等の印刷は（株）能登印刷、会場造作は（株）伏見工芸、作品輸送および展示・撤去作業は（株）日本通運関西美術品支店、音声ガイドは（株）カセットミュージアムの各社が担当した。

さて、新型コロナウイルスによる感染症の拡大は当館の展覧会運

営にも少なからぬ影響を及ぼした。緊急事態宣言の発出に伴い、展覧会準備もままならなかったが、開催の可否をめぐって議論がなされ、開会式・内覧会の中止や外部講師を招聘した講演会等をおこなわないこと、来館者の検温・マスク着用・会場内でのソーシャルディスタンスの確保等を条件にすることを定め、開催へ向けて粛々と準備をおこなった。思い返せば先行きはきわめて不透明な中ではあったにもかかわらず、幸いにして所蔵者各位のご理解を得て出品の了承を得、無事開催にこぎつけることができただけでなく、大過なく当初予定の会期を全うすることができた。

### 2. 展覧会のコンセプト

奈良・興福寺阿修羅像、東大寺法華堂不空罽索観音像や戒壇院四天王像など、天平期の仏像は日本の仏教美術を代表する作品であり、これまで多くの人々を魅了してきた。天平美術は日本美術史上の古典の位置を占める、という命題はすでに自明のことのようにも思うが、日本の美術史自体が近代の所産であり、いかに政治的に体系化されたかはすでにすぐれた研究によって明らかにされてきている<sup>①</sup>。また、美術に限らず「古典」や伝統が制度的・政治的に創出されたものであることが、国内外の様々な分野で論じられ、認められるに至っているのが現状である<sup>②</sup>。

たしかに、日本の美術史が体系化されたのは明治になってからのことであり、その際に天平美術が古典と位置付けられた経緯がある。ところが、前近代を通じて天平美術は人々に振り返られる存在ではなかったのか。だとすれば、それはいかなる理由によるのか。その個別具体の理由について、実際に作品を展示することで理解できな

いだらうかという問題意識を持ち、本展を企画した。天平美術が日本美術史の古典として揺るがない地位を獲得したのは、明治期の美術史の制度化によるだけではなく、それ以前の天平美術へのまなごしの集大成であったのではないかとという疑問が本展の発想の根底にあった。ちなみに、展覧会名の副題「高遠なる理想の美」は岡倉天心の言葉に想を得たものである。天心は明治二十四年（一八九一）の東京美術学校における講義「日本美術史」の中で、天平時代美術の特徴は第一に「理想的なりしこと」とし、とりわけ彫刻は天平に精妙を極めるとしたうえで「後世、定朝、運慶出ずるあるも、其の高遠なる点は、到底企て及ぶところにあらず」と評価している。こうした評言によったのが副題「高遠なる理想の美」である。

### 3. 会場構成

本展は大阪市立美術館の一階展示室を会場として開催された。南第一〇室から第十四室までと北館第四室と第五室の計六室を使用し、順路を反時計回りに設定した。以下、実際の展覧会会場について見てみたい。まず、一室目（南第一〇室）はプロローグ「天平探求正倉院宝物の輝きを求めて」と第一章「天平前夜 天平美術の源泉」で、正倉院宝物模造と唐代文物・白鳳仏を中心に展示した。半期で展示替えをおこなったが、正面に展示した銀鍍金六花形杯と螺鈿鏡（いずれも兵庫・白鶴美術館蔵）がまばゆい光を放ち、目を引いた。二室目（第十一室）は第二章「天平精華 祈りの造形」である。当初は一具として造像されたらしい脱活乾漆造／木造阿弥陀如来坐像（兵庫・金蔵寺蔵）と脱活乾漆造菩薩形坐像（神奈川・龍華寺蔵、神奈川県立金沢文庫保管）の両像が初めて同じ会場で展示され

た。いわば、本展のひとつの目玉でもあった。会場の壁面を黒く塗りこめ、正面には摂津国分寺跡推定地から出土した蓮華文軒丸瓦の瓦当文様を大きくあらわしたほか、周囲のケースには各所よりご出品いただいた国宝・重文の紫紙金字金光明最勝王経を展示することで、両像が摂津国分寺に安置されていた可能性と、その歴史的邂逅とを可視的に表現した【図1】。両像が隣に並ぶことで、その一具性は多くの方に実感として認められたのではないだろうか。

三室目（第十二室）には難波宮跡および四天王寺より出土した奈良時代の軒瓦のほか、高槻市より出土した国宝・金銅石川年足墓誌（個人蔵）と重要文化財・紙本墨書灌頂随願往生経（石川年足願経・奈良国立博物館蔵）を展示することで大阪における「天平」を表現した。同経は天平九年（七三七）亡息の追善に写経されたものである。この年は天然痘が猛威をふるった年であったことを考えると、この時亡くなった年足の息子もまた天然痘の被害者かもしれない。コロナ禍の我々も他人ごとではない切実な願いの姿がそこにはある。また、仏像をはじめとする天平美術がまったき姿で現代にまで伝えられていることはきわめてまれなことであることを理解するために、保存状態の良い木心乾漆菩薩坐像（京都・観音寺蔵）とともに、脱活乾漆八部衆腕部（東京国立博物館蔵）等の仏像の断片や器物の断片を展示した。一見すればただの破片にしか見えないような「天平のかげら」から往時をしのび、断片でさえも大切に保存してきた古人へ敬意を表した【図2】。

四室目（第十三室）における第三章「天平回帰 復古・追慕・憧憬」では、まず古筆手鑑や古裂帖による古写経や正倉院裂の収集を紹介した。次いで近世における天平礼賛の例として、慈雲尊者飲光

による戒律復興運動に伴う古袈裟の復元と養鷗徹底による古経探索事業とを紹介した。また、東京国立博物館の協力により、十二件の正倉院裂を展示することができた。これは先の古裂帖収載の正倉院裂とともに、明治九年（一八七六）に内務卿大久保利通の発意によって殖産興業の糧とすべく正倉院に蔵される古裂が全国へ頒布されたものの一部である。現代的見地からは、貴重な文化財の破壊行為として強く非難されるべき所為であろうが、当時としては国内産業の振興と伝統産業の保護、古代意匠の活用とを考えた結果の妙策であった。<sup>3</sup>現代の価値観で一面的に批判することは難しい。むしろ、文化財の活用が声高に叫ばれる現代的にあつてこそ重要な資料的価値を持つ作品群であると言えるだろう。そして、この部屋の最後には蘭奢待をテーマとしたコーナーを設けた。正倉院宝物《黄熟香》は古来「蘭奢待」の銘をもつて知られ、もつともよく知られた正倉院宝物のひとつである。愛知・徳川美術館からは源三位頼政拝領との由緒を持つ香木片「蘭奢待」のほか、一説に蘭奢待の皮目部分ともいわれる香木銘三吉野などを出品いただいた。いずれも今も馥郁たる香りを湛える名香である。これを追体験していただけないことは誠に不本意ではあるが、ケース内に密閉して観覧に供した。また、蘭奢待の名を高めたのが織田信長による截香事件であろう。このことを当時の役僧であつた東大寺の浄実が書きとめた《三倉開封日記》（奈良・東大寺蔵）と重要文化財・正親町天皇御消息「蘭奢待云々」（京都国立博物館蔵）とが展示に厚みを持たせたほか、何より森川杜園による原寸大の蘭奢待模刻（奈良・東大寺蔵）が展示室に威風を払って鎮座した【図3】。この模刻は明治六年（一八七三）に東大寺真言院で開催された博覧会のために制作されたもの

である。模刻とは言え、香木としての性質を持たない純粹なオブジェ・彫刻という意味では近代彫刻作品の嚆矢と評価すべき重要作品であり、今後の研究の深化が期待される作品である。

北館の第二会場へと移り、五室目（第四室）には中近世絵画による天平礼賛のかたちを確認した。重要文化財・絵因果経（東京・大東急記念文庫蔵）は巻末奥書に「住吉住人介法橋慶忍并子息聖衆丸」と絵師の名が記され、住吉の絵師が関わったことが知られる重要作例である。この慶忍については「慶恩」として伝わった可能性が高く、近世の作ながら中将姫像（本館蔵）は「住吉慶恩筆」の箱書を持つ。無論、この箱書に信を置くことなどできないが、重要なのは作者として仮託されるほどには住吉慶恩の名が通行していたという事実である。半ば伝説化しながらも実体のない虚像が近世の人々の共通認識としてあつたことは注意されてよい。近世における住吉派の復興という政治的な問題が深く関わりと予想されるが、「住吉慶恩」にどのようなイメージを持っていたのか、今後深く探る必要があるだろう。<sup>4</sup>今回展示した東京芸術大学所蔵の住吉家粉本戒壇院厨子扉絵（奈良国立博物館蔵）も天平絵画の様相を知る大きな手掛かりとなる重要作例である。<sup>5</sup>厨子における本来の図様配置の復元等残された課題も多いが、今回はまずその図像を楽しむべく、専用の長大なケースを用意し、明治期の模本（東京国立博物館蔵）とともに展示することで、全容を観覧できるよう工夫した【図4】。白描図像であり、一見してその重要性を理解することは難しいかもしれないが、贅言を尽くすよりもこうしたケースに展示することで重要性を可視化することができたのではないかと考える。

この展示室の後半は第四章「天平幻想 古典化される天平美術」で、近代洋画を中心に展示した。ここでの注目作は重要文化財・藤島武二《天平の面影》（石橋財団アーティゾン美術館蔵）である。同時代の画家たちへ影響にとどまらず、蒲原有明はそのものずばり「天平の面影（藤嶋武二氏筆）」と題した詩を発表するなど、本作の果たした役割は大きかった<sup>6)</sup>。青木繁が本作に影響を受けたことも明らかで、展示作品である《享楽》（大原美術館蔵）のほか《天平時代》（石橋財団アーティゾン美術館蔵）と題した《享楽》と同趣の作品を残している。いずれもこの期を代表する洋画であり、浪漫主義的・象徴主義的な思潮を背景とした歴史画としての評価がなされる<sup>7)</sup>。今回は両作品を隣に並べて展示することで、その目指した方向性と、結果としてあらわされたその趣の違いとを実感できるように配慮した【図5】。そうすることで、藤島の金地を背景としながらも精緻なタッチと穏やかな色調で表現された画面と、青木の原色を多用した荒いタッチによる情熱的な画面との対比が際立った。青木の「空想的」とも評される天平風景は、歴史風俗画というよりあたかも神話世界を描いたかのようでさえある。『古事記』『日本書紀』を編纂した奈良時代は、神話から歴史を語り、生み出した時代であった。青木はその時代をあたかも神話世界のように描いてみせたのだった。原色を多用した湿潤な雰囲気漂う画面には半裸の女性もあり、この国の過去を描いているようには見えない。図録の解説等でも触れたが、このことは『稿本日本帝国美術略史』において天平時代が日本的ではなく「東洋大陸的」であるという歴史観を示していたことと関係があるのかもしれない。すなわち、青木は天平時代を日本的ではなく「東洋大陸的」、具体的にはたとえばインド風に描

いたのかもしれない<sup>9)</sup>。エキゾティシズムは通例地理的・文化的な距離感から生ずるものである。ところが、本作はエキゾティシズムが時間的な距離感からも生じることが如実に物語っている点で、改めて興味深い作例といえることができるだろう。

最後の展示室（第五室）は広い空間を活かして主に彫刻作品を展示した。古代の伎楽面から近代の仏像模刻までを紹介することで、岡倉天心の天平彫刻へのまなざしを追体験する空間を構成した<sup>10)</sup>【図6】。また、天平改元一二〇〇年を記念して昭和三年（一九二八）に大規模な展覧会をはじめとする種々の文化事業が朝日新聞社主・村山龍平の発意でおこなわれたことを、当時の雑誌や絵葉書等の資料で紹介した<sup>11)</sup>。最後のエピソード「天平礼賛 歴史の中の天平美術」では三幅の紺紙銀字華嚴経（小田原文化財団蔵）を展示した。本作は第二章でも紹介したいいわゆる二月堂焼経で、現代美術作家杉本博司により軸装に改装され、古裂等を用いて装丁されている。独特の色彩感覚とぜいたくな作品配置は本品に新たな価値を吹き込んだ作と評価することができるだろう。天平美術が現代作家をも刺激している好例である。所蔵者の協力を得て、会場内ではこの作品のみ撮影可とした。

以上、会場ではそれぞれの作品の鑑賞はもとより、作品同士をゆるやかにつなぐ物語が流れていることを意識してもらえよう、展示に工夫を凝らしたつもりではある。

#### 4. 課題

さて、今回の企画段階では問題点として認識しておきながらも実際の展覧会ではじゅうぶんに追いきれなかった課題がある。ここで

は、そのうち次の三点挙げておきたい。まず、『七大寺日記』『七大寺巡礼私記』に代表される平安時代後期の南都巡礼の文化を組み込めなかったことである。大江親通の記述からは治承四年（一一八〇）南都焼き討ち以前の奈良の諸寺の様子がかがえ貴重であるが、当時の人々の価値観を知ることができる点でも貴重である。美術館での展示ではどうしても展示作品の「美」が問題となり、クローズアップされる。のみならず、現代の天平美術への評価は、その造形美によるところが大きい。ところが、大江親通らの価値判断は決して美醜だけの判断ではなかったことが知られるのである。例えば、『七大寺日記』『七大寺巡礼私記』では薬師寺本尊の薬師如来像は大安寺の釈迦像を除けば最も優れた像として評価される。その造形に対する評言でもあるはずだが、それ以上に両像が傑出した霊験像であることを物語るとの指摘<sup>12</sup>はきわめて重要である。同様に、これを遡る藤原道長の吉野参詣途上における南都諸寺巡礼もまた重要である。こうした南都の聖地としての強い磁性が人々のまなざしを天平美術へと向けたことは間違いない。問題は先述したような霊験仏としての評価と造形美とが峻別されるものなのか、混然一体となった評価だったのか、そうしたことを作品の展示を通して問い直すことができても良かったかもしれない。

次に、平家一門による焼き討ちに端を発する鎌倉期の南都復興事業についてである。本展においてもこの期の造像として次のような重要作品の出品を賜った。重要文化財・康慶作木造伎楽面力士（京都・神童寺蔵）、重要文化財・快慶作木造執金剛神立像（京都・金剛院蔵）がそれだが、いずれも原像が現存しながら模刻された例である。つまり、復興像ではない。解説等でも指摘した通り、こうし

た現存像の模刻の経験が失われた像の復興に与えた影響は決して小さくないはずであり、そうした意味でもきわめて貴重な作例であるとの評価は揺るがない。しかし、というよりもだからこそ、南都焼き討ちによって失われた像の復興に関わる造像についても力点を置いて紹介すべきだったかと思う。また、単なる復興像だけでなく、奈良・秋篠寺の重要文化財・脱活乾漆造／木造伎芸天立像のように、残された頭部を活用して体部を木造で新造するようなケースも図録などで紹介するべきだったろう。同像については企画構想段階からリストアップしていたのだが、実際に移動・展示するのは困難であるとの判断に至った経緯がある。また、次項ともかわるが中世南都仏画についてももう少し取り上げ、深く掘り下げるべきだったかとも考えるが、この問題は現状でやや手に余るといのが本音であり、今後の課題として残しておきたい。

三点目に、絵画の問題である。前項でも触れた南都仏画の問題もあるが、深く掘り下げることができなかったのが近代日本画における天平表象の問題である。この分野については、中野慎之氏が研究を進めており、近々論考を発表される予定とも聞く。楽しみに待ちたい。また、近代洋画については文学との共鳴について、もう少し深める必要があったかもしれない。会場には薄田泣菫『白羊宮』を展示し、同書所収の詩「ああ大和にしあらましかば」の一節を大きく掲示した。この詩を高吟し、当時の思潮に浸りながら作品を鑑賞する空間もまた一興であると考えたが、「展示室内では会話を控えてください」というカードを持った看視員が展示室内にいる状況とは矛盾することとなった。マスクの下で小さくつぶやくか黙読するにとどめざるを得なかったのは、当然のこととは言え、いささか残

念であった。さらに、近代洋画における天平美人図としては、今回残念ながら出品がかなわなかったが関根正二の大正六年（一九一七）の作品《天平美人》（大阪中之島美術館蔵）も忘れることができない存在である。綿布に墨と油彩で描かれた二曲一隻屏風仕立てのこの作品は、関根が当時失恋した相手を理想化して描いたものという<sup>(13)</sup>。この作品でも、天平美人は正倉院宝物として知られる古代楽器「阮咸」を手にしている。近代洋画における天平美人が樹下で楽器を手にするという定型表現についても、もう少し考察が必要だったかもしれない。これも今後の課題である。

#### むすびにかえて

以上、図録に記したことも多少重複するが、備忘を兼ねて気づいたことや残された課題を記録しておくこととした。展覧会の常として、構想段階からすればいずれの章も今回展示しえたのはその氷山の一角にすぎない。掘り下げれば各章ともひとつの展覧会を構成できるだけの関連作品を挙げ得る豊かな世界を背後に持つ。右に課題として挙げた問題点や追加で挙げた作例も、そのほんの一例に過ぎない。もし本展覧会を観覧し、あるいは図録を瞥見し、その背後にある問題意識と作品とに思いを致していただけたとすれば、担当者冥利に尽きるというものである。

最後に、このような先行き不透明な状況の中にもかかわらず、展覧会の趣旨を理解していただき快く出品を承諾された所蔵者・関係者各位にあらためて深甚の感謝をささげたい。さらに担当者の方を汲んで会場・広報・図録といった形にしてください。関係各社の皆様にも心より感謝申し上げます。

#### 註

1 美術・美術史の制度化については以下を参照。

北澤憲昭『眼の神殿「美術」受容史ノート』美術出版社、一九八九年。  
木下直之『美術という見世物 油絵茶屋の時代』平凡社、一九九三年。

佐藤道信『「日本美術」誕生 近代日本の「ことば」と戦略』講談社選書メチエ、一九九六年。

佐藤道信『明治国家と近代美術美の政治学』吉川弘文館、一九九九年。

北澤憲昭・佐藤道信・森仁史編『美術の日本近現代史 制度・言説・造型』東京美術、二〇一四年。

2 「古典」や伝統が創出されたことについては以下を参照。

E・ホブズボウム、T・レンジャー編（前川啓治、梶原景昭他訳）『創られた伝統』紀伊國屋書店、一九九二年。

ハルオ・シラネ（衣笠正晃訳）『創造された古典―カノン形成のパラダイムと批評的展望』ハルオ・シラネ、鈴木登美編『創造された古典―カノン形成・国民国家・日本文学』新曜社、一九九九年。

品田悦一『万葉集の発明 新装版 国民国家と文化装置としての古典』新曜社、二〇一九年。

3

正倉院裂頒布の成果はほとんど見られず、その実態はよくわかってない。正倉院文様の意匠が活用された例としては次のように明治宮殿の内装や大阪博物館の天井画が知られる。

恵美千鶴子「明治宮殿常御殿襖画の考案―正倉院鴨毛屏風模造・平家納経模本の引用と山高信離」『MUSEUM』六一七、二〇〇八年。

恵美千鶴子「明治の皇室に選ばれた表象 明治宮殿と御物」塩谷純・増野恵子・恵美千鶴子編『天皇の美術史』六『近代皇室イメージの創出 明治・大正時代』吉川弘文館、二〇一七年。

橋爪節也「明治二十一年の巨獣たち―大阪府立博物館美術館の天井画群―」『大阪の歴史』八二、二〇一四年。

4

住吉慶忍および近世住吉派については以下を参照。  
脇本十九郎「慶忍か慶恩か」『画説』十四、一九三八年。

瀬谷愛「住吉派興隆―住吉慶忍から住吉派へ―」下原美保編『近世やまと絵再考―日・英・米それぞれの視点から』ブリュッケ、二〇一三年。

5

下原美保『住吉派研究』藝華書院、二〇一七年。  
田中一松「東大寺戒壇院扉絵に就て」田中一松絵画史論集刊行会編『田

- 中一松『絵画史論集』下、中央公論美術出版、一九八六年（初出は一九四一年）。
- 谷口耕生「俱舍曼荼羅と天平復古」林温編（『仏教美術史論集一』）『様式論—スタイルとモードの分析』、竹林舎、二〇一二年。
- 西川明彦「明治時代の正倉院宝物」奈良国立博物館編『正倉院宝物に学ぶ』三、思文閣出版、二〇一九年。
- 明治期の美術と文芸の交流・共鳴および薄田泣菫・蒲原有明については以下を参照。
- 木股知史『画文共鳴—『みだれ髪』から『月に吠える』へ』岩波書店、二〇〇八年。
- 松村緑『薄田泣菫考』、教育出版センター、一九七七年。
- 倉敷市・薄田泣菫文庫調査研究プロジェクトチーム編『薄田泣菫読本』翰林書房、二〇一九年。
- 沢沢孝輔『蒲原有明論』、中央公論社、一九八〇年。
- 谷田博幸『唯美主義とジャパニズム』名古屋大学出版会、二〇〇四年。
- 近代洋画における歴史画および藤島武二『天平の面影』については以下を参照。
- 植野健造『日本近代洋画の成立 白馬会』、中央公論美術出版、二〇〇五年。
- 児島薫「藤島武二研究拾遺—「天平時代」および「東洋」の表現について」『近代画説』二〇、二〇一一年。
- 高階絵里加「歴史画の成立」明治維新学会編『講座 明治維新』十一『明治維新と宗教・文化』、有志舎、二〇一六年。
- 高階秀爾「明治期歴史画論序説」『三の丸尚蔵館年報・紀要』創刊号、一九九六年。
- 中田裕子「藤島武二『天平の面影』《諸音》そして《蝶》に表象された雅楽と西洋音楽」石橋財団ブリヂストン美術館、久留米・石橋美術館編『館報』三二〜三三・三九、一九八二〜八四年・一九九二年。
- 山梨俊夫「描かれた歴史 日本近代と『歴史画』の磁場」、ブリュッケ、二〇〇五年。
- 平出実乃里「藤島武二『天平の面影』に見る筈候について」『文化財学報』三七、二〇一九年。
- 河北倫明「青木繁」ブリヂストン美術館・石橋美術館・日本経済新聞社編『青木繁展』図録、一九七二年。
- 前掲註歴史画、児島論文参照。なお、後述するように本展では掘り下げ
- ることができなかったが、明治期の日本画におけるインド風表現にも注意が必要であろう。
- 稲賀繁美「絵画の臨界」名古屋大学出版会、二〇一四年。
- 中野慎之「明治後期の日本画における仏教」『京都府埋蔵文化財論集』七、二〇一六年。
- 岡倉天心の思潮と近代の彫刻に関しては以下を参照。
- 田中修二「日本美術史の古代憧憬—岡倉天心と荻原守衛」佐伯有清編『日本古代中世の政治と文化』、吉川弘文館、一九九七年。
- 「岡倉天心—芸術教育の歩み—」展実行委員会編『いま 天心を語る』、東京藝術大学出版会、二〇一〇年。
- 『特別展 仏像修理100年』奈良国立博物館、二〇一〇年。
- 高階秀爾「西洋主義者としての天心」『国華』一四〇〇、二〇一二年。
- 浅井和春「明治仏像模刻論—岡倉天心の模造観の形成」『国華』一四〇〇、二〇一二年。
- 佐藤道信「岡浦天心の世界観と歴史観—近代日本の美術の定位」『国華』一四〇〇、二〇一二年。
- 黒岩康博「好古の瘴気 近代奈良の蒐集家と郷土研究」慶應義塾大学出版会、二〇一七年。
- 田中修二『近代日本彫刻史』国書刊行会、二〇一八年。
- 同時期に同様の趣旨で展覧会が開催された。兵庫・香雪美術館企画展「古に憧れて 聖徳太子から聖武天皇へ」二〇二〇年十月三十一日〜十二月十三日。図録は発行されず、主な出品作品が次の図録に「付録 古代憧憬」として掲載される。
- 『聖徳太子 時空をつなぐものがたり』展図録、中之島香雪美術館、二〇二〇年。
- 12 中野聰「霊験仏としての大安寺釈迦如来像」『仏教芸術』二四九、二〇〇〇年。
- 13 村田真宏「関根正二作『天平美人』屏風について」『福島県立美術館研究紀要』三、一九八八年。
- 『生誕一二〇年・没後一〇〇年 関根正二展』福島県立美術館・三重県立美術館・神奈川県立近代美術館・中日新聞社、二〇一九年。
- 【付記】本稿はJSPS科学研究費補助金JP一八K〇〇二〇二の助成を受けた研究成果の一部を含む。

（児島大輔）



図2 会場風景 天平のかけら



図1 会場風景 天平仏の歴史的邂逅



図4 会場風景 天平絵画を想う



図3 会場風景 蘭奢待を見る



図6 会場風景 歴史の中の天平仏



図5 会場風景 歴史としての天平